修羅

万華鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
修羅

【Ｎコード】
Ｎ０５３５Ｘ

【作者名】
万華鏡

【あらすじ】
何時も道理の万屋にかかってきた一本の電話
それがこれから起こるすべての出来事の始まりだった・・・・・・
―――――――――――――――――――――
銀さん達の過去堤造があります
残酷な描写もあるので回覧注意してください

ハジマリ

昔々、ある所に一人の女の子がいました
その女の子は何時も暗い暗い部屋にいました

その女の子に唯一光を教えてくれた人がいました
その人は光其の物のような人でした
女の子はその人をとても慕っていました

ある日、その人がその部屋から女の子を連れだしてくれました
始めてみる外の世界
そしてたくさんの光に女の子は大いに楽しみました

次の日、その人は来ませんでした
いつまでもいつまでも
何時まで待っても来てくれませんでした

怒った女の子は、その部屋から抜け出しました

すると、人が倒れていました

不思議に思った女の子はその人に近づいてみました
近づいてみるとあたり一面真っ赤に染まっていました

顔を見ようとしましたが、その人には顔がありませんでした

あたりを見回すと一つの首がありました

その首は、あの人のものでした
触ってみましたがあの暖かさもありません
あの光もありません

女の子は、悲しみました
あの光を失った事に
そして怒りました
その光をうばった者に

女の子は、修羅になりました

光を消した者を探すために皆の光を消していきました

そしてあたりは、真っ暗な闇になりました

第一話　電話

何時も道理の平和な時
万屋銀ちゃんのオーナーである坂田銀時は、いつもの特等席に座り
ジャンプを読み老けていた
万屋の突っ込み的ポジションで家事全般を担当している志村新八は、
買い物に
紅一点であり怪力娘な神楽は、貞晴の散歩に行って今はいない

≪ジリリリリーン　ジリリリリーン≫

「おいおい、今いいところだッつうのに　こんな時に電話かよ・・・
・・・」

何時もならここで新八が出るところだが、今はその新八が不在のため
銀時は重い腰をあげ、受話器を取った

「はい、万屋でーす」
「ああ、いたか万屋！急で悪いんだが新選組「おかけになった電話
番号は、現在使われておりません
　分かったならとっとと電話切れこのヤロー」

ガッチャン！
大きい音を立てながら、銀時は受話器を叩きつける様にもどした

「只でさえメンドクサイ奴らがわざわざ電話してくるんだ　めんど
くさいことに決まってんだろーが」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ところ変わって新撰組屯所

「おい、トシ・・・・・・・」

「どうした近藤さん」

土方が見ると新撰組局長である近藤が情けない顔でこちらを見ている
どうやら電話を切られたらしい

「ハァ・・・・近藤さん貸してくれ　俺がかける」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

≪ジリリリリーン　ジリリリリリーン≫

「また電話かよ　今度は何だ？」

「はい万屋です」

「今から新撰組屯所に来い」

その言葉を残し電話は切れてしまった

「何だって言うんだよ・・・・・」

そう呟いた時、玄関の方からドアを開ける音がした

「ただいまアル！！」

「ちょっと、神楽ちゃん荷物持ってよ！」

万屋の従業員二人がドタドタ廊下を歩きながら部屋に入ってきた

「お前らうるせーよ　家の中では静かにしろよ」

「銀チャーン！スーパーの抽選でパフェ食べ放題券当てたアル！！」

「お！！マジか！おっしゃ今から皆で行くか、パフェ食いに」

「ちょっと待って下さい銀さん」

銀時が子供みたいにはしゃいでいると新八の冷めた声が聞こえた

「銀さん、僕たちが帰ってくる前に電話があったでしょ」

「な、なんの事だよ新八くん。で、電話なんてかかってきてないよ」

「嘘つかないでください。帰る途中に沖田さんに会ったんです
その時に
『近藤さんから旦那に依頼の電話が入ると思うんで
まあ、多分旦那電話切ると思うから一応伝え時まさァ』
って言われたんです。」

「あのヤロー俺の事はおみとうしってか・・・・・・」

舌打ち混じりにつぶやいた銀時のその言葉を新八は見逃さなかった

「やっぱり電話があったんですね！！」

「ちっ・・・・・・だってあいつらが依頼してくるときはだいたい面倒事押し付けてくる時だしさー」

「銀さん！久々の依頼なんですよ！！」

その当理

万屋にはここ1ヶ月依頼が来ていないのである

「そろそろお金も危ないですし

それにこのまんま依頼受けないと話が進まないんですよ！！！」

「何言ってんだよ新八くん。元々こんなくだらない小説読んでくれてる人がいるわけないじゃん

だから作者だって1ヶ月以上放置してたんだろーが」

「そんな事言ってたら切りがありませんよ！！！

この依頼が終わったらパフェ食べに行きましょう

それまでお預けです！！！」

「えええええーーーーー」

万屋に銀時のブウイングが響き渡った

第二話　依頼

所変わって新撰組屯所前

「おーい、税金金ドロボー共ーー仕方がないから来てやったんだーーーー

とっとと出てこいや！！！！！！！」

「五月蝿いわ！！！！！！！！！！！」

その声とともに何処からともなく跳び蹴りが銀時めがけて飛んできた

突然の事に対応できるはずもなく、銀時はそのまま地面に倒れこんだ

「おいテメー！！！！！いきなり飛び蹴りた―いい度胸じゃねえか！！！！！！

お母さんはそんな子に育てた覚えはありません！！！！！」

「お前に育てられた覚えもねーよ！！！！！

そもそもテメ―が人んちの前で大声出したのが原因だろうが！！」

銀時を蹴り倒した人物・・・・・

基、新撰組の副長土方十四郎は銀時に怒鳴り散らしながら向き直った

「お前等とこんな所で言い争ってるほど俺らも暇じゃねーンだよ

とりあえず依頼の話をするから中に入れ」

「へぇーー？今日はずいぶん大人しいねえ土方君？

等々負けを認めたの？」

「あぁ？」

「まあねえ　土方君一度も勝った事ないしね
それに人気投票でも負けてるしね」

「・・・・・」

「あの、鬼の副長が一般市民に負けを認めたとあっちゃあ
新撰組の名も落ちたよねえ」

「てめえ！なめとんのか！！！！あぁ！！！！！！」

折角土方が食い下がったのに銀時が煽った為、土方が銀時に殴りかかろうとした

「ちょっと待って下さい！！！！！」

「今ここで争われると困るんです！！！！
それに土方さんも忙しいんでしょ
ならこんな所で争ってる暇はないんじゃないんですか？」

二人の間に沈黙が流れる

「ちっ」

先に沈黙を破ったのは、土方だった
舌打ちをしてから一向についてくるように促した

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

通された部屋には、すでに先客がいた

「万屋！来てくれたか！！」

そう言い近藤がこちらに向き直った

「まあ、そこに座れ
今、茶と菓子を出させよう」

「おお、ゴリラにしては気が利いてるネ
私、酢昆布欲しいアル！！！」

「俺、パフェ食いたいんだけど
まあ、パフェないんなら甘い物適当に出して」

「銀さん達、少しは遠慮したらどうなんですか？
あ、僕、ハーゲンダッシュで」

各々の欲しい物を好き勝手に言っている万屋一行
しかし、その後すぐ・・・・・

「さあ、好きなだけ食べるがいい」

「おいおい、まじかよ・・・・・」

「やったアル！！１週間分位はあるアルよ！！！」

なんと、好き勝手言った物がすべて出てきたのである

「やったある！頂きますアル！！」

「ちょっと待て神楽」

「あんたらが、こうもご丁寧に俺たちをもてなすたあ
絶対に何か裏があるはずだ」

「・・・・・・」

「あんたら、何をそんなに勿体ぶってんだ？」

沈黙　長く続くかと思った沈黙は、それまで黙っていた人物により破られた

「近藤さん、もういいだろう
ちょっとアイツ連れてくるからその間にこいつらに説明頼む」

「ああ」

そう言い向き直った近藤の顔にはいつものふざけた様子ではなかった

「1週間ほど前、見回り中の隊士が倒れている人を見つけてな」

「外傷はそこまで無かったんだがな
頭を強く打ったらしく記憶が全部吹っ飛んでたんだ」

「・・・・それで、俺たちに何を頼みたいんだ？」

「万屋に頼みたいのは、その子の記憶を取り戻すこと
そしてその子の保護だ」

「近藤さん、連れてきたぜ」

そう言い入ってきた土方に続いて入ってきた人物は、俯き加減で部屋に入ってきた
少しおどおどしながら土方と一緒に近藤の隣に座った

「この子が、さっき話した子だ」

とてもきれいな金色の髪
色白の肌
俯いているので顔はよく見えないがおそらく相当の美人だろう

「・・・・・・あんた・・・・・・顔をあげたらどうだ？」

銀時の問いかけにその人物はびくりと肩を震わせながらも顔をあげた
その瞳は燃えるように赤く光っていた

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「銀さん？」

まじまじとその子を見つめて動かなくなった銀時に声をかけたが
「あぁ」と言うあいまいな返事しか返ってこなかった

「はっきり言ってこの子は何も覚えていない
・・・・・・・・・・・・自分の名前すらもだ」

「えっ・・・・そ、それでどうやってこの子の記憶を取り戻すって言うんですか！！」

「全く手掛かりがないという訳ではない」

そう言い土方が机の上に1冊の和綴じの本と赤い杖を取りだした

「この二つがコイツが持っていたもんだ」

「こっちの和綴じの本はどうやらどっかの教本みたいなんだ、杖の方はまあ、見ての通りただの杖だ」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・この依頼、受けようじゃねーか」

「銀さん！？」

手掛かりは無いに等しいこの記憶を取り戻す依頼
それをあのめんどくさがり屋の銀時が受けると言いだしたのだ
驚かないはずがない

「こんな依頼受けて大丈夫なんですか？」

「ああ、心当たりがある」

「その代わり、お代ははずめよ」

「ああ、約束してやる」

その言葉を聞き、銀時は満足そうに笑った

第三話　名前

あの後、新撰組屯所を後にした万屋一行はあの子を連れて喫茶店まで来ていた

「・・・・・・・・銀さん」

「モグモグうん？」

「どうしたじゃないでしょうが！！ちゃんと説明してください！！！」

「五月蝿いよ新八くん」

つい、銀時の態度にいらつき声を荒げて他の客の視線を集めてしまい銀時の声で我に返り席に着いた

「銀さん説明してください、いくらなんでも説明が無さすぎます」

「俺が、不可能な依頼を受けるわけねーだろ」

「なら、何か分かってるんですか？！」

「ああ・・・・・・コイツとは腐れ縁だからな」

そう言い銀時は静かにあの子を見た

あの子は、神楽の質問におどおどしながらも答えていた

「銀ちゃん！！」

それまで、あの子と話していた神楽がこちらに向き直った

「この子名前なんて言うアルか？
名前で呼ばないのはなんだか嫌アル」

「ああ、そいつの名前か？

そいつの名前は、葉暮立花
俺が付けた名前だ」

「銀ちゃんが、考えたアルか？」

「ああそうだ」

「・・・・・葉暮立花・・・・・・・・私の名前・・・・・・」

その子・・・・・・葉暮立花はその名前を噛み締める様に繰り返した

「立花」

「今度からお前の事は立花って呼ぶアル
だからお前も私の事神楽って呼ぶヨロシ！」

「はい・・・・・」

「敬語は無しアル！
そして、私の事も神楽って呼び捨てで呼ぶアル！！」

「うん」

初めは、ぎこちなかったがだんだんと打ち解けてきた
それを感じた新八は、銀時の方を見た

「銀さん、立花さん慣れてきたみたいですね」

「ああ」

しかし、銀時の返事は曖昧で上の空だった
大好きなパフェを食べる手も止まっている

「銀さん？どうしたんですか？」

「ん？ああ」

「銀さん大丈夫ですか？
さっきからなんだか変ですよ」

「何言ってんだ何時も道理だろ？」

「何言ってるか新八！！銀ちゃんがおかしいのはいつものことネ！！」

「それは、そうなんですけど
いつもよりおかしいって言うか・・・・・」

「おいおいテメーら！！！さっきから何言ってんだ
馬鹿にするのもいい加減にしろや！！！！」

何時も道理がやがやと騒ぎだした万屋一行
初めは、その様子に戸惑っていたが次第に3人に交じって笑い始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0535x/

修羅

2011年12月11日20時50分発行